

女子学生にとっての大学生活

— 20 答法による調査から —

富安玲子

1. 問題

学生相談を担当していると、毎年、新入生の多くが大学の生活に慣れ、落着きを見出して来る頃、何人かから次のような訴えを受けるようになる。「入学はしたけれど、これから何を目標にして行けばよいのか。それがわからないでいる自分を持て余している。」「大学にさえ入れば、ほんとに自分のしたいことが見つかるだろうと期待してきたけれど、描いていた大学生活とはどうも違う感じがする。」

明確な目標をもち、その実現化のために、ある大学・学部を選択するという視点からのみの進路決定は、理想的な姿でしかない現実がある。高校生は、高校の社会的位置と自分の成績から志望を自己抑制しているという武内清の指摘¹⁾のとおり、入学可能な大学・学部の中へ自らをおさめていこうとする力が働いているのが現状であろう。

本学の入学生対象に実施された調査の中での入学考慮要因について見ても、三大要因として一般入学生は学業成績、自分の興味・関心、受験科目を挙げ、推薦入学生は学業成績、自分の興味・関心、家族の意見を挙げている。次いで、両入学生ともに大学の評判や学風・特色および自分のなりたい職業を考慮したとしている。いずれにしても、自分の興味・関心も学業成績という制約のもとに置かれざるを得ない状況を示している。女子学

女子学生にとっての大学生活

生の場合は、その現役率の高さから見て、浪人してまでも希望を通すことは考えない、あるいは、それが許されないという中で、とにかく決定を迫られていくようすをうかがい知ることができる。

進路選択の過程におけるこのような問題を抱えながら、多様な入学動機をもつ学生ひとりひとりがあるひとつの大学を選び、そこで「大学生らしい」自分を確立していくことになるのである。先述のような訴えをもつ学生たちも殆んどのが、4年間の大学生活の中で、大学生としての自己を形成していくと考えられるが、一般に、それはどのような過程を辿るのであろうか。

大学・短大への進学率は、男子の場合、昭和50年の44%をピークにして、現在の38%まで僅かながら下降を示しているのに対して、女子はここ10年間32~33%を保持している。進学先は男子が殆んど大学であるのに対して、女子は約3分の2が短大である。したがって、高進学率が唱えられてはいるが、女子の4年制大学への進学率は12%に過ぎないことになる。進学決定について男子がより早い時期になされるのに対して女子はより遅く、²⁾ また、教育程度も男子は学力により多く左右されるのに対して、女子は家庭の社会経済的地位により多く影響される³⁾ といわれている。こうしたことを考慮すると、現代にあっても、やはり、大学に進学を許された女子学生は、数少ない恵まれた存在と考えてよいと思われる。そういう背景をもって入学した学生たちは、親や社会から「大学生らしく」あるべき姿を期待されながら、自らの大学生活に対する期待感を現実化しようとして歩き出す。これは、藤原・冷川⁴⁾ の述べるように、外的・社会的な枠組みからの自己規定の可能性と、内的・主観的な枠組みからの自己規定の可能性について、全体として、青年期における自己の確立という発達課題として統合されていく過程としてとらえることができる。

4年間の大学生活に対する期待感は短大生の学生生活へのそれとは異なり、短大生が入学時から、卒業後の生活への展望をもっているのに対して、

女子学生にとっての大学生活

大学生は大学生活そのものへの関心が高く、自己の発見への期待や漠然とであるが「何かつかめる」期待感をもつものが多い。⁵⁾ 4年間の経過の中で、自己への関心を高めつつ、卒業後の女性としての生き方について具体的に考えるに及び、女性としての同一性確立が課題となってくる。外的・内的枠組みをもちながらも、自己規定の可能性についてのさまざまな試行錯誤が許容される学生生活を、ひとりひとりがどのように受け留め、位置づけているのであろうか。その受け留め方如何が、卒業後の生き方と大きく関わっていくのだと考えられる。

そこで、ひとりひとりの大学生活についての意識を知ることにより、現実には充実感を味わっているものと味わえないものとのちがいはどこにあるのかを探っていくことにしたい。

2. 方法

被調査者は、本学文学部英文学科の学生で1年104名、2年99名、3年81名、4年50名、合計334名であった。しかし、結果の分析にあたっては、各学年50名を対象とし、1年2年3年についてはランダムに抽出を行なった。

調査は20答法(TST)^(註)の形式をとった。学生が受ける刺激語としては「私にとって大学生活とは」で、実際の教示は次のように行われた。「これから時間をおいて20回『あなたにとって大学生活とは?』と、次々と聞きますから、自分の頭に浮んだことをそのたびに書いて下さい。なんでもかまいません。思い浮かばなければその回はブランクにしておいて下さい。」と言い、20秒間隔で問を発する。

また、face sheetとして、簡単な質問がなされた。すなわち、学生生活の充実度と満足度、大学進学意志決定状況、選択科目の履修状況、卒業後の進路志望の明確度、クラブ活動状況、交友関係に関するものである。

女子学生にとっての大学生活

なお、調査は無記名の方式をとり、1980年6月に実施されたものである。

(註) 20答法は、Kuhn, M. H. ら⁶⁾によって考案されたパーソナリティ・テストで、特に自己態度を測定するために有効な方法として用いられるものである。これは、20回「あなたは誰ですか？」を繰り返す質問に対して、20通りの答を自由記述させるものである。与える刺激は最小にして、自分について自由に思い浮ぶままに記述させるのである。20秒間隔で次々と同じ問いかけを受ける被調査者は、ありのままの姿をさらけ出すことになるので、投映的技法⁷⁾に位置づけられている。

3. 結果

(1) 大学生活についての概観

20答法と共に実施された大学生活の現況についての調査項目の結果を、まず概観すると次のとおりである。

①学生生活の充実感 現在の大学生活を「充実していると思う」もの、および「大体充実していると思う」ものは、全体で46%で約半数が充実感を味わっている。学年によってやや異なった傾向が見られ、1年から4年までそれぞれ38%、42%、42%、60%が充実しているとしている。すなわち、4年に充実感を味わうものが多い傾向が示され、1年との間に有意差が認められる。

②本学での大学生活の満足感 「満足している」「大体満足している」ものは全体で30%であった。学年別に見ると1年24%、2年26%、3年18%、4年50%で、4年生が他の学年に比して有意に満足感を表明しているものが多くなっている。それと表裏をなして、不満感を抱くものは4年では40%で、2年の62%、3年の68%に比して有意に少ない。

③大学進学の設定 「全く自分の意志で」「大体自分の意志で」を併せると全体で89%を示し、殆んどのものが程度の差はありながら、自らの意志により、大学進学の道を選んでいる。この傾向に学年間の差は認められ

女子学生にとっての大学生活

ない。したがって、周囲の意見による消極的進学者は各学年ともほぼ7%となっている。

④受講意欲——選択科目の履修状況—— 開講科目を「殆んど」および「大体」受講しているものは1年86%，2年88%と高率を示しているが、学年が進むと次第に低下し、3年70%，4年52%となった。逆に、「必要単位数を考えて少し余裕のある程度」の受講者は学年が進むに連れて多くなり、1年から4年まで、それぞれ4%，12%，28%，32%を示している。大学前半と後半とでは履修状況が異なり、既得の単位数を考慮しながら受講科目数を決定している様子がうかがわれる。

⑤卒業後の進路志望 具体的な進路先については質問していないが、志望の明確なものは4年で82%，次いで3年62%，1年56%，2年46%となり、4年は他の学年より有意に高くなっているのは当然ともいえよう。大学の前半では卒業後の明確な進路志望をもつものは約半数である。

⑥クラブ活動 学内のクラブ活動に「積極的に参加」しているものは各学年ともほぼ40%で、「あまり積極的ではないが参加」しているものを加えると、70%のものがクラブ活動をしていることになり、学年による差は認められない。また、学外のサークルには、「積極的参加」および「一応の参加」併せて20%程度のものが活動していることになる。

⑦学内の交友関係 「親友がいる」ものの割合は全体で50%で、有意差が認められないが、学年が進むにつれて増加する傾向がうかがわれる。「親友とは言えないが友人が多い」ものも、全体で40%を数え、逆に「学内の友人が少ない」と思っているものは1割に満たない。

⑧充実感と諸側面 充実感と上記の②から⑦までの6側面との関係についてみると、有意な関係が認められたのは、学年全体として、「満足感」($\chi^2=60.43$, $df=4$, $p<.01$), 「大学進学の自己決定」($\chi^2=10.16$, $df=4$, $p<.05$), 「クラブ活動の参加」($\chi^2=8.40$, $df=3$, $p<.05$), 「親友・友人の存在」($\chi^2=21.08$, $df=3$, $p<.01$)であった。大学生活におい

女子学生にとっての大学生活

て充実感を味わうことができるか否かは、満足感をもつこと、大学進学を自らの意志で決定すること、クラブ活動に参加すること、友人関係が良好であること、とおおいに関係があるといえる。

(2) 20答法による大学生活についての分析

①記述数

次々と20回繰り返し問われた「大学生活とは」に対して、どのくらい記述しているであろうか。まず、記述された反応数から結果を分析することにした。表1のとおり、全体の平均記述数は、15.5であるが、分散分析

表1 学年別記述数

学 年	人 数	総記述数	平均記述数 (標準偏差)
1 年	50	741	14.82 (4.36)
2 年	50	701	14.02 (4.56)
3 年	50	786	15.72 (3.57)
4 年	50	873	17.46 (2.65)
全 体	200	3101	15.51 (4.07)

の結果、学年間に有意差が認められた ($F=7.20$, $df=3/197$, $p<.01$)。次いで、学年間の対比較をしたところ、1年と4年、2年と4年、3年と4年、2年と3年に有意な差が認められ、(それぞれ、 $t=3.56$, $df=98$, $p<.01$; $t=4.61$, $df=98$, $p<.01$; $t=2.77$, $df=98$, $p<.01$; $t=2.08$, $df=98$, $p<.05$)、4年の反応数がどの学年よりも多く、20回中17.5回の記述がなされている。2年の記述数は14で、1年との間に有意差はないが、3年、4年より有意に少なく、記述数だけから見ると、大学生活に関する表出の乏しさがうかがわれる。一般に、20答法による自己意識の検査において、あまりにも表出数が少ない場合には、防衛的態度を見ることが出来るとされている。しかし、本調査の場合は無記名であることや、自我そのものに直接触れる課題ではないことから、2年の平均反応数の少

女子学生にとっての大学生活

なさは、大学生活内容の乏しさや迷いの反映と見ることもできるのではな
 かるうか。

大学生活における充実感の有無
 によって、記述数に差があるかど
 うか、検討を試みたが、充実群
 (「充実している」「大体充実して
 いる」と表明したもの)と非充実
 群(「充実していない」「あまり充
 実していない」「どちらともいえ

表2 群別構成人数

学 年	充実群	非充実群	計
1 年	19	31	50
2 年	21	29	50
3 年	21	29	50
4 年	30	20	50
全 体	91	109	200

ない」と表明したもの)の間には、各学年ともに有意な差は認められな
 かった。なお、充実群と非充実群の学年別構成は表2のとおりである。

②記述内容の分析

次に記述された内容について整理してみると、図1のように、内容を7

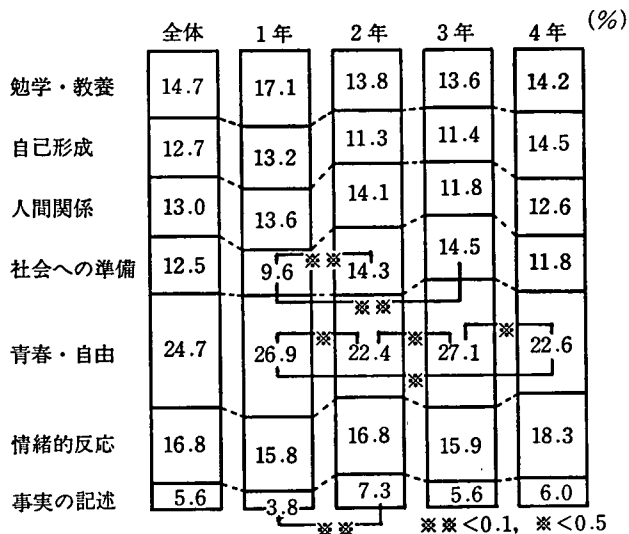


図1 記述内容の学年別比較

女子学生に亅っての大学生活

領域に纏めることができた。「勉学・教養」は学ぶ生活として大学生活を位置づける記述で、専門を学ぶ、知識を得る、知性をつける、読書ができるという専門や教養への志向と共に、具体的に授業や単位、試験などについての記述も含まれるものである。「自己形成」は、自分を見つめ直す、個性をみがく、さまざまな経験による自己成長、人生勉強の機会、人を見る目を養うなど、自己の確立と人格形成に関する記述である。「人間関係」は、大学生活を人との交流を深めるものとして意義を認めるもので、友人・教師・先輩後輩などさまざまな人との出会いの経験や期待、そして、それらの人々との触れ合いの現実などに関する記述、および、大学生活を経験させてくれる親との関係の見つめ直しや依存と自立などの記述が含まれる。「社会への準備」は、社会に出る前の人生の一ステップとして、大学生活を位置づけるもので、就職や結婚のための資格取得などの準備、将来の生き方を決定する場などの内容と共に、人生経験としてのアルバイトに関する記述も含まれる。「青春・自由」は、クラブ活動・旅行・趣味などに青春を謳歌し、自由を満喫する内容である。「情緒的反應」は、以上の五つの領域に関する記述ではなく、例えば、楽しい、充実している、のんびりしている、退屈だ、無駄だなど、位置づけが特定せず、情緒的な表現のみの場合である。「事実の記述」は、経済的負担や時間的経過、物理的な環境などについての事実のみを記述している場合である。

以上の7領域についての全体的傾向は、青春謳歌の領域により多くの記述が見られ、次いで情緒的反應が多い。この反應について、積極的肯定的表現（充実している、楽しいなど）と消極的否定的表現（退屈だ、無駄使いなど）に分けると、その割合はそれぞれ47%と53%でほぼ半々であった。「勉学・教養」「自己形成」、「人間関係」および「社会への準備」の領域はほぼ等しく13~14%の反應が見られている。学年差と7領域との連関については差が見られないが、「社会への準備」において1年より2年および3年の記述が多いこと、および、「青春・自由」においては、1年と3年

女子学生にとっての大学生活

が2年および4年よりも多く反応していることが有意差で目立つところである。

大学生活について考えたときに意識する領域は、その人が充実感を味わっているか否かで異なるであろうか。表3のとおり、「自己形成」「人間関係」「青春・自由」の領域での記述は、充実群により多い傾向がうかがわれ、情緒的反応に関しては、非充実群がより多く反応する傾向が認められる。このように、充実群と非充実群とでは、大学生活に関する意識領域が異なることがうかがわれる。

表3 記述内容の群別比較

カテゴリー	学年 群	全 体		1 年		2 年		3 年		4 年	
		充 実 群	非 充 実 群	充 実 群	非 充 実 群	充 実 群	非 充 実 群	充 実 群	非 充 実 群	充 実 群	非 充 実 群
勉学・教養		13.8	15.4	15.7	18.0	12.6	14.8	13.6	13.6	13.6	15.1
自己形成		14.6	11.1	17.5**	10.7	13.9 *	9.1	11.8	11.2	15.1	13.7
人間関係		14.6	11.6	15.3	12.6	15.5	13.0	13.3	10.7	14.6 *	9.8
社会への準備		12.5	12.6	8.8	10.1	12.3	15.9	13.6	15.1	13.8 *	8.9
青春・自由		26.5 †	23.2	28.1	26.1	22.7	22.1	29.7	25.2	25.8 *	17.9
情緒的反応		13.2**	19.9	9.1**	19.7	16.7	16.9	13.0 †	18.0	13.2**	25.7
事実の記述		4.9	6.2	5.5	2.8	6.3	8.1	4.8	6.1	3.9**	8.9
計		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

** $p < .01$

* $p < .05$

† $p < .10$

③否定的反応

記述された反応について、それが肯定的か、中立的か、否定的かのいずれの表現かを分類することによって、大学生活に対する感情的水準での意識を探ることにしたい。否定的反応の現われる割合を学年別に充実群・非充実群の2群間で比較したものが表4である。具体的に否定的反応とは、「虚栄心を育てるだけ」「無味乾燥」「隋性で通っているだけ」「結婚までのひまつぶし」「期待はずれ」「やりなおしたい生活」「親に大きな負担を強いるだ

女子学生にとっての大学生活

け」「人間関係が面倒なところ」「無気力になる」「変りばえしない単調な生活」などを指しているが、最もそれが多いのは3年で、1年および4年より有意な差が示されている(それぞれ $U_0=3.28 > 2.58$, $p < .01$, $U_0=3.75 > 2.58$, $p < .01$)。また、否定的反応の少ないのは4年で、2年および3年とは有意差が認められている(それぞれ $U_0=2.31 > 1.96$, $p < .05$, $U_0=3.75 > 2.58$, $p < .01$)。また、各学年ともに充実群と非充実群との間には有意差をもって充実群に否定的反応は少なくなっている。当然とも言える事柄であるが、充実を味わっていない人たちは、大学生活に対して、否定的な表現をし、意識化しているということを如実に示していると言えよう。

表4 否定的反応の2群比較

学 年	群 反 応		充 実 群		非 充 実 群		全 体	
	%	(否定的 反応数/ 総反 応数)	%	(否定的 反応数/ 総反 応数)	%	(否定的 反応数/ 総反 応数)	%	(否定的 反応数/ 総反 応数)
1 年	1.82	(5/274) **	10.06	(47/467)	7.02	(52/741)		
2 年	7.26	(23/317) *	11.98	(46/384)	9.84	(69/701)		
3 年	3.94	(13/330) **	17.76	(81/456)	11.96	(94/786)		
4 年	2.33	(12/515) **	12.85	(46/358)	6.64	(58/873)		
全 体	3.69	(53/1436) **	13.21	(220/1665)	8.80	(273/3101)		

** $p < .01$

* $p < .05$

④記述内容の拡がり

先に記述内容についての分析を試みたが、分類したそれぞれの領域について、各人がいくつの領域に亙って記述しているか、を検討することにしたい。これによって、大学生活への対応の柔軟性を探ることができると考えられる。

表5は、記述領域数の平均値が示されているが、充実群と非充実群とを比較すると、どの学年も充実群の方に記述領域の拡がりをより多く認めることができる。大学生活に充実感を味わっているものは、大学生活をさま

女子学生にとっての大学生活

表5 記述内容の拡がり

学 年	充 実 群	非充実群	全 体
1 年	4.48 (1.27) *	3.71 (1.14)	4.00 (1.25)
2 年	5.33 (1.29) **	3.66 (0.88)	4.36 (1.35)
3 年	4.19 (1.01) *	35.2 (0.93)	3.80 (1.02)
4 年	4.83 (0.86) +	4.20 (1.25)	4.58 (1.08)
全 体	4.73 (1.17) **	3.73 (1.07)	4.19 (1.22)

数字は記述領域(1~7)の数の平均値 ()内は標準偏差

** $p < .01$ * $p < .05$ + $p < .10$

さまざまな側面から考えることができる対応の姿勢を持っていることがうかがわれる。学年別に見ると、学年間にも差が認められ($F=4.27$, $df=3/194$, $p < .01$), 4年がより拡がりをもち、3年がより狭い傾向をもつといえる。この学年差は、表4の否定的反応の学年差と対応させることもできよう。すなわち、否定的反応の少ない4年は、大学生活に対してさまざまな側面を考えることができる拡がりをより大きく示しているのに対して、否定的反応の最も多い3年は領域の拡がりが小さい。

次に、否定反応が記述数のうちで占める割合と、記述内容の拡がりとの対応をひとりひとりについてプロットしてみたものが図2である。記述内容が7領域に拡がっているもので、15%以上の否定的反応を示したものはなく、6領域に互るものでは20%以上の否定的反応するものはいない。5領域以下で記述するものに、否定的反応の高いものが見られている。全体に、2領域以下の記述は人数も少ないが、5から3領域へ狭くなるにつれて、否定的反応をするものが多くなり、また、高い割合を示すものが多くなっている傾向がうかがわれる。また、充実感を味わっているものより、味わっているとはいえないものは領域が狭いほど多くなり、そして、否定的反応の高い割合を示すものほど多くなっていることも特徴としてあげることができよう。

記述内容の拡がり ↓

否定的反応の割合 →

	0 %	5 ~	10 ~	15 ~	20 ~	25 ~	30 ~	35 ~	40 ~	45 ~
7	oooo	oo x	o							
6	oooooooooo oo xxx	x		oo x						
5	oooooooooo oooooooooo oooo xxxxxxxxxxxx x	oooooooo x	oo xxx	o		o x			x	xx
4	oooooooooo oooo xxxxxxxxxxxx xxx	oooooooo xxxxxxxx	oo xxxxx		xxx	xxx	x		x	
3	ooo xxxxxxxxxxxx xxx	oooooooo xxxx	o xxxx	xxxxxx		xxx	xxx		o	xxxxxxxx
2	oo xxxx	x	x	x	x		x			
1										x

女子学生にとっての大学生活

図2 記述内容の拡がりとな否定的反応の割合との関係

- 充実群 (91名)
- × 非充実群 (109名)

4. 考 察

以上の結果から、各学年の特徴をまずとらえてみたい。

1年 は、大学生活に対する意識内容については、「青春・自由」の領域に関するものが、3年と共に多く、「社会への準備」は他のどの学年よりも少ない。また、「勉学・教養」に対しては、他学年よりやや多い傾向が示されている。大学生活に対する期待感が大きく、具体的に卒業後の生活設計よりも、学生生活を十分に活用しようという態度が溢れている。否定的反応は少ない方であるが、期待感が大きいくに現実とのずれを意識せざるを得ないようすもうかがわれる。次のケースは、このような期待と現実、そして今後の学生生活への決意が述べられており、1年の特徴をよく表わしているものと言える。

1. 教養を身につける場
2. 友人をつくる
3. 難しい勉強に耐える
4. 人間的に成長できるようにしたい
5. 勉強だけでなくクラブでも頑張る
6. 毎日欠席しないように出る
7. 最後の勉強
8. 最後の学生生活を楽しむ
9. 特に面白いところはない
10. 将来の構想を練る
11. 休みを有効に使う
12. 親から独立できるように
13. 遊んでばかりはいないつもり
14. 通学に時間がかかって疲れる
15. 将来の糧になるものを見つける
16. 英会話ができるようになりたい
17. 何故かこうなったけど……努力したい
18. 勉強は大変だけどしっかりやる
19. まじめに
20. すべてにおいて成長しよう

2年 は、先ず平均記述数が4学年中最も少ない点が目立っている。意識内容では大学生活の「青春・自由」の領域が1年よりも減少し、その代り「社会への準備」段階としての意識が強くなる。また「事実の記述」で、たとえば大学卒の学歴を得るといような反応が1年よりも多く見られるようになる。一方、「勉学・教養」領域への反応は1年より減少の傾向が見られる。反応領域の拡がりは1年より大きくなるが、否定的反応も増加している。これらから、2年になると、入学当初に持った期待に対応する

女子学生にとっての大学生活

現実の姿をよく吟味することにより、自己の置かれている位置づけを「社会への準備」段階にあるものとして自覚するようすがうかがわれる。一方、記述数の少なさや事実の記述の増加は、大学生活に積極的な意味が見出せないで、迷う姿と見ることもできよう。次のケースは、記述数が多いが、それらの特徴が表われている。

1. 将来のための準備
2. 友達との共同生活
3. 学力を身につける
4. 将来のことをよく考える時
5. クラブをすること
6. 友達を見つける
7. 自分にあった仕事をさがす所
8. おしゃれのできる所
9. 大人になる一步手前
10. 今までできなかったことをする所
11. 学歴のひとつ
12. 人間関係を学ぶ所
- (13.)
14. 苦痛
15. たのしみ
16. 学生としての最後
17. 思いきり遊べる所
18. 自分の人生観をもつ所
19. ひまつぶし
20. 青春のまん中

3年は、4年に次いで記述数が多いが、記述内容の領域の拡がりには少なく、否定的反応が最も多く現われている。意識された内容としては「青春・自由」の領域が多い。また、「社会への準備」段階としての意識も2年とともになりに多くの反応が見られる。次のケースのような「不安と焦り」や、「何かしなければならぬができない」という表現は3年の特徴的な記述である。3年になると、高校を共に卒業し、短大に進学した友人たちは社会人としてのスタートを切っているのに対して、学生の身分でいられることを再確認する場合も多いと考えられる。そこで、与えられた自由の意味を見つめ直すことになり、2年で減少した「青春・自由」領域の記述が再び増加することになると考えられる。1年の段階での手放しの青春謳歌や自由の満喫とはやや異なり、その重さを自覚し、ともすれば否定的反応ともなって現われているのではないだろうか。大学生活の後半に入り、入学時の目的を果たしているか、周囲の自分に対する期待に込えているか、卒業後の設計が具体的に見えてきているか、などなどについて思い巡らす中で、焦燥感が顕著になってくるのも首肯できることである。次のケースは、焦燥感とそれ故のアンビバレントな反応、意識内容の反復、および否定的反応が現われやすい状態を示していると思われる。

女子学生にとっての大学生活

1. 退屈そのもの
2. 自分で考えるという場を与えられること
3. 親友のできないこと
- (4.)
5. 何かやってみたいと思えるところ
6. むなしいもの
7. 自分の進路を決めるところ
8. もっと真剣に生きなければならぬところ
9. 不可解
10. 疲れるところ
11. 大いに期待はずれなこと
12. なくてもあってもいいようなもの
13. トンネルの中にいる自分を見つけること
14. 不安と焦りで過ぎていくこと
15. 時間のたつのが早すぎる
16. 海外旅行へ行けそうで行けない時期
17. やることがありすぎてなかなか見つからないところ
18. もっと楽しいはずのものだった
19. もう一人の自分が勝手に生きているところ
20. 終るとほっとするところ

4年は、記述数が他学年に比して最も多く、反応領域の拡がりも最も大きい。また、否定的反応も他学年より少なくなっている。これらから最終学年となったことにより、それまでの学生生活を見つめ直す余裕が生まれ、それがさまざまな領域への反応となって現われてきていると考えられる。「青春・自由」に関しては他の領域に比して多く記述されているが、3年よりは減少している。一方、自己形成に関する反応にやや増加の傾向がうかがわれ、人間的に成長した姿（たとえば、自分の主張をもち、相手の立場を理解したり、周りの者への配慮が可能になり、感謝の気持をもつことができるようになったなど）の記述が目立った。また、「勉強・教養」に関しての記述の割合は、2年や3年と殆んど変わらないが、次のケースにあるように、「勉強の大切さを知らせてくれた」あるいは、「学びたいという気持を育てる」という反応は4年にもみ認められるものであった。

1. 勉強すること
2. 自分をみがくこと
3. 社会に出るまでの猶予期間
4. いろいろな知識を得ること
5. 友だちをたくさんつくること
6. 人間的に成長すること
7. 自己を見つめる期間
8. 遊びもする
9. クラブをする
10. 大切なものであった
11. 未熟な自分にとっては、社会に出るまでの必要欠くべからざるもの
12. 有意義なもの
13. 友とのふれあい
14. 立派な教師との出会い
15. 本を読む時間をもつ
16. 毎日の生活
17. 終わってみれば短いもの
18. 今になって勉強の大切さを知らせてくれたもの
19. 人生のほんの一部
20. 大学生活から得たものは大きい

次に、充実群と非充実群との比較を検討したい。両群の間に、記述され

女子学生にとっての大学生活

た反応の量的な差は認められないが、記述内容については異った傾向がうかがわれる。既述の如く、充実群は、大学生活を自己形成の場として、青春を謳歌し自由を満喫できる場として、そして人間関係を重視する側面から大学生活をより多く意識し、捉えている。それに比して、非充実群は情緒的反応がより多い。結局、充実感を味わっている人は、大学生活の捉え方が具体的で、明確であるのに対して、充実感を持つことができない人は、大学生活の特定の側面についての不充実感を表明するよりも、情緒的水準での反応をより多く示していると言えよう。否定的反応が非充実群に多いのは当然とも言えるが、記述内容の掘りについても明確な差が認められた。充実群はより多くの内容領域に亙る記述をしている。即ち、大学生活をさまざまな側面から捉え、柔軟性のある対応をしていることを示している。本来、充実感を味わうか否かや、その味わい方は各人各様であって、ひとつの分野を極める喜びの中に充実感を覚える場合もあれば、さまざまな分野を体験できる満足感が充実感と重なり合う場合もある。また、入学目的の充足度とも大きく関わっている。しかし、表5や図2に示された、さまざまな大学生活の分野に意識の領域を拡げ、具体的な場面を考慮できることと充実感との対応は、現在のような進路選択の複雑な事情も手伝って、多様な入学動機をもち、その動機づけ水準の強さもさまざまな学生たちの姿から首肯できる結果と考えられる。

ここでは、充実感の内容については検討されていないが、4年になると、充実感を味わうものが最も多く、6割を示すようになる。これは期待感と現実とのギャップを調整し、あるいは、周囲からの大学生らしくあるべき姿という期待像を自らのうちに取り入れたり、再構築したりして、内的自己規定と外的自己規定との統合が計られて来ていることを示すものであろう。このような過程を土台として、大多数の人たちは、同一性の確立へのステップを踏んでいくことになる。しかし、大学生活に充実感を味わえない人や否定的反応を多く表出していた人はどのようにその階段を登って

女子学生にとっての大学生活

いくのであろうか。また、充実感と連関が見出された諸条件を何故もつことができないのであろうか。それらの背景を探り、解決への援助の可能性を求めることが課題であらう。

<引用文献>

1. 武内清 高校教育の変貌, 山村健・天野郁夫編 青年期の進路選択 有斐閣 1980
2. 日本リクルートセンター 父母の進学への期待度調査 1979
3. Stockard, J & Johnson, M. M. Sex Role. Prentice-Hall 1980
5. 藤原勝紀・冷川昭子 学生生活と同一性問題 遠藤辰雄編 アイデンティティの心理学 ナカニシヤ出版 1981
6. 富安玲子 大学と短大: その特性に関する一調査研究 愛知淑徳大学論集 第4号 69—87, 1979
7. Kuhn, M. H. & McPartland, T. S. An Empirical Investigation of Self-attitudes. American Sociological Review, 19, 68—76, 1954
8. 村上英治 投影の世界 鈴木達也編 心理学ゼミナール 福村出版 1977